

<共通論題>

バーゼルアコードのこれまでの経緯とバーゼル III の問題点

明治学院大学 佐々木 百合

<報告要旨>

バーゼル I にあたるいわゆる BIS 規制が合意されてから 30 年になる。バーゼル規制という現行のバージョンにのみ関心が向きがちだが、バーゼル規制の銀行への影響を継続的にアカデミックの立場から分析してきた経験から、長期的な視野で規制を評価するとともに、そこから考えられる現在の問題点について述べたい。

BIS 規制が導入されてから現在までの経緯を振り返ると、この規制は危機が起きると厳しくなり、しばらくすると厳しいことが批判され緩和される、ということを繰り返している。そもそも、BIS 規制導入のきっかけはヘルシュタット危機といわれる銀行破綻の国際的波及と言われているが、いざ導入されると銀行の貸出行動を抑制しているのではないかという批判やそれを証明する研究が合いついだ。また、規制が単純すぎて本来の目的を達成できていないことなど、規制のしくみについての批判や研究も盛んにおこなわれた。それをうけて BIS 規制は改訂を重ね、バーゼル II が完成した。

しかし、バーゼル II が完成した 2000 年代半ばには、過去の危機の記憶は遠くなり、また、欧米は証券化の発展をもとにバブルが増幅していったときであったこともあり、バーゼル規制への批判のほうが多く聞かれるようになっていた。日本では 2007 年にバーゼル II を導入したが、複雑すぎて導入にコストのかかる規制、という印象が当時世間では強かったように思う。アメリカでは、危機を防げないのにコストが高すぎる、との批判が非常に強く、様々な理由をもとにバーゼル II は導入されなかった。

ところが、2008 年 9 月に金融危機が起きるとアメリカの態度が一変し、バーゼル II を飛び越えて非常に厳しいバーゼル III で対処すると表明し、G20 全体もこれに賛成した。このように、規制は危機になると厳しくなり、しばらくすると緩くなるという経緯をたどってきた。これはもちろん政治的影響も反映している。危機時に各国の政権が、比較的短期的な視野で、危機を早急に収めようとするため、規制は厳しくなりがちで、そこでは、経済学的に最適な規制をつくるということが十分に考慮されていない。

このような経緯を踏まえて現在のバーゼル III を考えると、金融危機のダメージが大きかっただけに、過剰に厳しく複雑な規制となっている。そして、そろそろこの規制への批判が高まり、緩和を希望する議論が多く聞かれるようになるだろう。アカデミックな立場から重要なことは、問題点を明らかにして、この規制を少しでも経済学的に最適なものに近づけることだろう。本報告では、特にレバレッジ規制などの与える影響やいくつかの矛盾点について説明し、問題点や改善の方向について議論したい。